



## 余暇の教育的的重要性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道学芸大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 安藤, 忠吉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00000018">https://doi.org/10.32150/00000018</a>

させること」、又「精神的冒険に對する愛を喚起し刺戟すること」であるとしている。彼はかかる「考へること」や「思想」を少数者に於てでなく、多數者に於ける特權とすることが、何物をも恐れない精神的冒険や勇氣を養うことになることを確信する。これは科學的社會的知性が、社會改造の原動力であることを意味したものである。

社會再建の教育は、未來に希望を抱く創造的生産的なものでなければならぬ。「教育は死せる事實の受動的認識を目的とすべきでなくて、我々の努力によつて創造さるべき世界へ導かれる活動を目的としなければならぬ。それはギリシヤやルネッサンス時代の消滅した美に對する哀悼的希望によつてではなくかくあるべき社會の——思想が勝利をかち得る時代の輝やかなしいヴィジョン<sup>(9)</sup>に向つて進んで行かねばならぬ。かかる社會に生きる人間の科學的社會的知性の訓練が、社會的ヒューマニズムによつて特に強調される所以は自ずと明らかであろう。

- (1) 西田幾多郎と三木清の對談録—讀賣新聞(昭和十一年九月八日より五回に互り連載)

「ヒューマニズムの現代的意義、西田博士に訊く」創造性が人間の本質になって行くだろう。それは個人が世界の中心になるという個人中心の見方でなく、却つて人間がその中に入つてゐる。全体自身が創造的なもので、人間はその中のエレメントとしてクリエートして行く、人間はその創造的エレメントである。」

- (2) F. B. Stratemeyer: Developing a Curriculum for Modern Living. 1947. p. 44.

- (3) Ibid. p. 46—48.

- (4) Ibid. p. 45.

- (5) Th. Litt: Die Philosophie Der Gegenwart und ihr Einfluss auf das Bildungsideal. 1930. s. 70, 71.

- (6) 三木清: ヒューマニズムの哲學的基礎、思想 第214號

- (7) 統合(Integration)の思想は、特に最近のプロGRESS教育思想の中核をなしている。それは全体としての人間—知的、身体的、情緒的、社會的成長發達段階に在る人間—の概念に深く結びついている。統合は結局個々の人間の成長發達に伴う人格の發展に引き締める力を與へる原理である。而も具體的人格の發展を現實社會生活の中に求めようとすれば、その統合の働らきをする原動力は知性の他はない。ジョン、デューイも Human Nature and Conduct の書に於て、かかる傾向の主張をなしている。

- (8) パートランド・ラッセル著 村上啓夫譯 社會改造の原理、世界大思想全集、101頁。

- (9) 前掲書 104頁

Harold Rugg もその著 Democracy and Curriculum 中で、青少年教育における American Vision を強調している。

## 余暇の教育的重要性

安 藤 忠 吉

Chukichi Ando: The Importance of Leisure in Education.

### 余暇の意義

余暇(Leisure time)は Spare time(余分の時間)である。いはばわれわれの生活の中に於ける余剰時間であるといえよう。しかし余剰時間とは何であるかを規定することになると非常にむづかしいのであるが、一應次のように分析的に考察してみることは不可能ではあるまい。われわれの日常生活は一日二十四時間を一環として、これの連続しているものであるが、これを分析してみると勤勞、勞働というような各人の本務活動に關する時間と生命を維持保全するための睡眠、食事、身仕度、排泄等の時間とに凡そ大別することが出来よう。これ等の活動を個人的面からみるならば生産

活動を通じて、われわれが生活してゆくための財貨とか物資を獲得し、自己及び家族の生計を維持するという生活上必須の領域に属するであらうし、睡眠、食事、身仕度、排泄等は生物的人間の生命維持のための基本的生活の領域に属すると考えられよう。しかしわれわれはこのような働き、食べ、眠るといつた生活領域以外にまだ重要な生活領域を持つている筈である。厳密に言えば、こういった生活上の必須的基本的活動の時間を二十四時間から減じた結果得られる時間がある。つまりこれ等の労働時間と生活の基本時間以外の時間、いはばこれ等から解放された時間を持つている。これが余暇である。しかし現實生活に於て實際的具体的にはこれ等三者は非常に重複したり混合したりしているので限界をはつきりと決定することは困難な場合が多い。しかし余暇はわれわれの現實生活の中に確に實存しているのであつて全然ないのではない。しかも余暇は生活の余白時間として、どうにでもよい時間であり、無益、不用な怠惰の時間であつてよい譯ではないのである。というのはわれわれの日常生活は勤務、生命維持、余暇という三者の織りなす時間的關係によつて構成され、しかもこれ等三者の間には精神的、身体的又經濟的に密接な連關があると考えられるからである。従つてわれわれの生活の向上充實という問題を考える場合には、これ等三者の有機的關連性に於けるそれぞれの向上を意圖しなくてはならないのであつて、三者の中いづれかが貧弱であり、或は犠牲に於て考えられてよい譯ではない。即ち生活の向上とか豊かな楽しい文化生活とかはこれ等三者の間にハーモニーとバランスがあつて、しかもこれ等が充實して効果的に遂行していける体制にある時に於ていえることではあるまいか。従つてわれわれが余暇の問題を考察する場合に於ても常に他の二者との關連性に於ける余暇というものを念頭において考察してゆかねば余暇の眞の意義は把握されないのであらう。尙ここで注意しなければならないことは、余暇は本務との關係に於てその意義を認識しなければならないということである。本務を持たない者、働かない者に於ては眞の意味の余暇はない譯である。従つて仕事と遊びの未分化の幼少者とか、病床にある者とかには眞の意味の余暇はないといえよう。

ところで余暇の問題が重要性を持つて人々の關心をひきはじめたのは何故であらうか。それは産業革命以來機械化のために生産についやされる勞力と時間が急に輕減して余暇時間が増大したためである。アメリカに於て最近余暇時間は一週平均40時間といはれる<sup>(1)</sup> から一日約5.7時間である。日本に於ては明治中期に於ては一日14.5時間の労働は珍しくなかつた<sup>(2)</sup> といはれるが、だんだん減少の傾向をたどり労働基準法が施行されてからは、労働時間が8時間に制限され従つて勤務大衆の余暇時間は形式的には増大される体制にむかつていといえよう。しかし昭和二十三年東京都の壯年勤務大衆（男）について私が調査した結果によると余暇時間は平日に於て約3.2時間休日に於て6.5時間である。この結果は一体何を物語るものであらうか。ここには恐らく經濟的産業的、社會的等の問題が存在するのであらうが、更にその根底には思想的問題が存在するものと予想されるのである。兎角日本に於てはアメリカにくらべ貧弱な余暇時間にあるということは事實である。しかし余暇時間は労働時間に原則的には制約されるのであるから、一應労働時間を8時間に制限したことは、過去よりも余暇時間を増大せしめる方向にむいていといと考えることは妥當であらうと思う。従つて余暇問題を考える場合に先づ一般大衆の余暇時間の増大をはかることが第一に大切ではあるが、しかし余暇時間が豊富に與えられたからといつてこれで余暇の問題性が總て解決した譯ではなくて余暇の問題は更にこの上にあるのである。

余暇は労働から解放された時間として Free time の性格を持つている。余暇が余暇としての意義を發揮するのは自由性に於てある。即ち J. Jones <sup>(3)</sup> がいふように one's disposal spare time であることに常に余暇のイデアがあるのである。逆にいえば自由性のない余暇は既に余暇の特性を失つていっているから眞の意味の余暇ではない。従つて囚人とか奴隷等には眞の意味の余暇はないといえよう。

余暇を余暇たらしめる本質が自由性、余暇をすすずる人の自由意志 (Voluntary) に於てあるということに余暇の重要性と問題性が所在するのである。つまり余暇時間は人々の自由意志によつて活動し得る時間で外部からの強制や束縛がなく、人々の好きな活動を自己の好みによつて選擇して行うことが出来るのであるから、ここにわれわれは喜びや満足が十分に得られる余地を有するのである。又人間にとつて人間らしさを深め高め表現し形成する自己表現 (Self-expression) 自己創造 (Self-creation) の機会もある譯である。ところでこのフリータイムの余暇の使い方には善悪の二つの道がひらかれている。つまり余暇時間を有効適切に使用し心身の健全化をはかり、人生を豊かな楽しみある創造の方向にむけ生活を豊かな文化的なものに形成してゆくことも出来るし、逆に余暇時間を拙劣且俗悪に使用し心身を害し自己を破滅させるばかりでなく、社會を毒するようにも使用し得る譯である。青少年の不良化の機会が多くは余暇時間内にあるということは多くの例によつてわれわれのよく知つている事實ではあるまいか。

「活動の選擇を許すことの望みは指導である」と G. M. Gloss<sup>(4)</sup> がいつているが個人の勝手氣儘な余暇使用は應々にあやまつた方向に走らせる。この點については山鹿素行がつとに「燕居」<sup>(5)</sup> の中に指摘しているのであつて、余暇の望ましい方向づけと使用法は教育問題としてとりあげねばならない。これは余暇生活の危険性を防止するという消極的意味に於てだけでなく、個人を十分に生長發達させ人生を豊かな楽しいものとして、健全なデモクラシー社會を建設するという積極的な近代的意味に於て余暇問題を取りあつかはねばならぬであらう。ここに余暇教育 (Leisure time Education) の重要性があると思う。更に教育が生活という原理によつて生活により生活にまで進められる新教育に於ては、「生活に對す教育は余暇に對する教育を意味する」<sup>(6)</sup> のものとして、一層眞剣に取りあげられ検討されなくてはならないと思う。

## 余暇の機能と價

上に余暇の本質として自由性をあげ、この自由性が人間形成的に使用されるために余暇教育が必要であることを述べたのであるが、それでは余暇は近代生活の中に於て如何なる機能をはたし、如何なる點に於て個人及び社會の發展に効果と貢獻をもたらすものであらうか。この點について私は心理學的 (Psychological) 生理學的 (Physiological) 社會學的 (Sociological) の三つの観点から考察してみたいと思う。しかもこれ等は人間存在の一領域であるから劃然と分離してはではなくて、それぞれは個人の全体的体制の中に相互關連的に位置づけられていると考ふべきであらう。

### (1) 心理學的 (Psychological)

幼兒に於ては仕事と遊びは未分化であるが、年齢の進むにつれて仕事と遊びとは分化して生活に對して一定の位置をしめるようになる。そして仕事は現實的に社會と關係し義務や責任の意識を伴うものとなる。従つて仕事には勝手氣儘の意識とは反對に緊張し本氣で仕事に従事するようになる。仕事がこのよゝな意識に於て遂行されるようになると、余暇は仕事から解放された時間として弛緩の時間としての意味を持つようになつてくる。余暇は仕事のアンチゼーシスとして考えられるようになり、余暇生活は仕事に對してエスケープ活動の性格をおびてくる。特に近代生活はミツチエルとマーソン<sup>(7)</sup> が述べているように、

1. 仕事が高度に特殊化して身体筋肉に對して極めて部分的にしか働かない。
2. 精神的には、部分的仕事の單調な反覆、従つて創造的表現の欠乏、機械使用からぐる過勞、交際の機會の欠除等からくる不愉快が多くなりつつある。とするならば、なおさら余暇は仕事からくる不愉快を回復し (Recuperation) 氣晴し (Diversion) する時間としての意味を持つてくるであらう。又勞働條件がたとえ快的なものに改善されたとしても仕事からは、緊張、外からの強制等を全然除

去することは不可能であらうし、われわれは日々の必然的なきまり仕事 (Rowtinization) には神経緊張と神経疲労とを伴いあきが生ずる。これに對して余暇は必然的に緊張の弛緩の時間として生活のリズムの中に意義づけられなければならない。われわれの生活は緊張と弛緩のリズムにあつてバランスを保つている時に健全であるといえよう。

更に余暇は仕事から解放された時間であるから何人にとつても自由な表現の時間である筈である人は本性として自由に喜びや満足を求め常に楽しい生活が出来ることを望んでいる。従つて余暇は人の喜びや楽しみを得る自由時間の性格を本質的に満足させるものでなくてはならない。そして眞の喜びや満足は自己表現、自己創造として個体が表現される際にもたらされる感情であつて、自己の文化的、情緒的、身体的欲求が發揮され、固有の手腕才能が十分に表現され、自己が自己に於て創造される時にはじめて大きな喜びや満足が得られるのである。こういった人間の諸欲求の表現は労働時間に於ても可能ではあるが、實際には十分な表現が困難な場合が多い。一般には余暇時間内の活動に於て得られると考へべきであらう。われわれの生活様式 (Mode of Life) は一層メカニゼーションの傾向にあつて、仕事時間内で自己表現が行はれ常に満足させられることは少なく、従つて仕事に於ては生物的、心理的、精神的な全一的人間の或る部分的活動で、自己の興味に従つて興味ある活動をするのは殆ど不可能だから、楽しみ要素は制限されているといえよう。余暇はこのような近代生活の難点に對して、色々な欲求、興味、衝動等を抑壓することなく、安全な方向に發散させ、全我的活動として喜びや満足と與え、自己表現の時間としての機能を持つものでなければならない。「人間は物質文明のために退化してゆく<sup>(8)</sup>」とするならば、人間は働らく生活の外にこういった勝義の余暇に於て、楽しみのある生活を持ち人間らしい圓滿な健全なヒューマニティーを實現してゆかななくてはならぬであらう。しかもわれわれは勤勞の義務を持つ以上余暇を楽しむ権利をも有する筈である。特に近代生活が苦勞やわざわいの多いものであるならば、是非とも自由な楽しい時間を持つことが人間的當然の要求として認められなければならないであらう。ところで具体的にはどのような余暇活動が心的満足と楽しみをもたらすのであろうか、一般に楽しみのある活動は play といはれる。そして余暇時間内の play は Recreation と呼ぶことが出来る。レクリエーションの本質は喜びと満足と個人にもたらし生活を更新 (refreshing) せしめる點にあると思ふのであるが如何なる活動がレクリエーションになるのであろうか。結論的にいえば活動の外的形式に於て決定されるのではなく、活動に参加している者の心的態度 (Mental Attitude) に於て決定される問題であつて一律に簡単に決定することは出来ないといえよう。例はレクリエーションとしてスポーツが面白いとしてもその種目に不得手な人にとつてはかえつて不愉快を與えるかもしれない。同一様式の余暇活動であつても各人に共通の喜びや満足と與えるとは限らないのであるから、心的満足が活動がもたらすか否かの決定はミッチェルとマニソン<sup>(9)</sup> 或はグツク<sup>(10)</sup> がいうように活動する者の主観性、態度、即ち活動者が喜びをもつてなしうるものにあるのであつて、活動そのものによつて客觀的外形的に決定されない。従つてわれわれの余暇活動はパラエターにとむ廣汎なものとならざるを得ない。しかし楽しむものなら全く何でもよい譯でない。N. E. A.<sup>(11)</sup> や G. M. Gloss<sup>(12)</sup> の意見を綜合してみると、心身の休養と健康の増進、業務の能率向上、望ましい品性の形成、民主的社會の發展に楽しみのある余暇活動を通じて貢獻しうるものが望ましいといえよう。

## (2) 生理學的 Physiological

心理學の見解に於て余暇の弛緩性、リズム性、愉悅性をあげたのであるが、心と身とは分離してゐるものではないから、精神が一定のリズムによつて弛緩と休息をうるならば、身体の疲勞も回復されることは明らかであるが、余暇の機能は單に疲勞の回復といった消極的意味に於て發見されるにとどまるものではなくて、身体の全体的健康度を増進するという積極的意味に於て理解されな

ればならない。先に述べたように近代生活は機械化によつて生物的、心理的、精神的全体としての人間の或る部分しか働かせない偏頗な活動が多い。更に身体面からみるならば単一作業の單調な反覆が多いので筋肉は部分的にしか使用されないの、生物學的機能面では「病氣になつた動物」になりつつあるのかもしれない。従つてここに全身的活動によるスポーツやゲームやその他体育的レクリエーションが奨励されなければならぬ理由が存在する。これ等は總稱して play といえるものであるから、play の持つ健康的及び品性の形成的價値が play 活動を通じて實現される譯である。しかも play は平等の人間關係に於て友愛、理解、分擔の感じの共通性をえしめるからデモクラシー社會の發展にも貢獻しうることとなる。しかし各人に同一のスポーツを同程度に要求することはレクリエーションの本旨ではない。個人にはアジャストメントがあるから各人の興味、身体的特徴技能、疲勞狀態等を考慮して自己に最適のものを選択しなくてはならない。烈しい肉體勞働をしている人々にはスポーツよりも靜的なレクリエーションが、或は仕事による肉體疲勞を回復させる運動が健康的にはよいであらうし、肉體的勞働を余りしない人に對しては全身的なレクリエーションスポーツがよいであらう。ここで注意しなければならないことは play には一般に「ふける」<sup>(13)</sup> という性質があるから楽しみ之余過度にならないようにすることである。H. S. Diehl<sup>(14)</sup> は次のような忠告をしている。「運動の安全な價値は心の状態よりも筋肉の状態により、又運動の型により、それをなす加減による。」として、(1) 心身の一般的状態を定期的な身體検査をうけて決定する。(2) 身體疲勞以下に運動する。休養の意味と中程度の疲勞の運動ならよしいが過激な過勞の運動をするならば、重大な損失となるであらう。

われわれは余暇の健康的意味を把握して自己に最適の型のレクリエーションを通じて單に疲勞の回復としてだけでなく、健康の増進のために、そして次の本務活動に能率と効果あらしめるように創造の領域に有効的に余暇を使用しなくてはならない。

余暇の價値をこのような創造性に於て把握するならば余暇は人生に於て勞働と對等のものとして評價されなくてはならないであらう。

### (3) 社會學的 Sociological

余暇の要求はその根本をヒューマニターにおいている。われわれは勤勞の義務とともに余暇を楽しく生活する権利をも有するといはれるのは、余暇生活は贅澤、浪費、怠慢という不健全なものとしてではなく、人間的要求の當然のものとしてヒューマニターの尊重の上に根據をおいているからである。封建社會に於ては大眾の自由の領域が極めて狭く従つて個人の生命の充實とか生活の楽しみとかは否定され、社會秩序は大眾の生命の否定の上に構成されていたともみられるのである。民主的社會は個性の十分な發揮を認め、大眾全体が豊かな幸福な生活をするを理想としてかかけこれを指して社會生活を改善し建設してゆかなくてはならないと考えるならば、大眾の生活は犠牲としてではなく、生活價値の承認の上に大らかに明るく豊かに伸長させられなければならない。従つて余暇の問題は一部の特權階級 (Privileged Class) のものとしてではなく、あらゆる階級、年齢層、性別について社會學的に検討されなくてはならない。近代國家に於ける Public Recreation の顯著な發展は余暇の大眾性従つて一般社會の健全化という点に立つていると考えられる。近代に於ける余暇の認識は大眾の幸福な生活へというヒューマンニードにもとづいて、人間性の充實、人間解放というヒューマニステックな思想を根底においていると考ふべきであらう。個人の幸福から一般社會 (General Society) の幸福へ擴大された立場から、余暇の問題を考える時には余暇の有効使用は、個人を通して社會の發展と向上更に民主的文化の發展に貢獻するものとして意義づけられる。

學校 (School) という言葉は skhole にはじまるがこれは Leisure を意味していた。そしてギリシャ貴族は自由人として Leisured Class であつたためにあの輝くヘルニズム文化を發展せしめ

たとえるならば、余暇と文化との間には密接な関連性があるように思う。逆説的には余暇のない生活を送っている階級には文化が発達しえないであらうともいえる。しかし近代社會に於ては人間の發見と共に文化も貴族的特權階級のものとしてではなく、デモクラテックなものとして一般社會の發展のために文化は大衆のものとして、大衆を文化的に向上せしめるものでなければならぬと考へられてきている。このためには先づ大衆が或る程度の余暇を持ち、しかもこの余暇使用を質的に向上させてゆかねばならない。しかも余暇使用を質的に向上せしめる要件は經濟力に勿論大いに依存している「貧乏暇なし」といはれるが、これは量的にだけでなく余暇の質にも關係しているのである。更にそれだけではなく、禁欲的、物的成功、極端な勤勉主義等の人生觀生活觀の改造をも要求している。人間の社會性の強調とともに、個人の余暇生活は大衆とともにうる方法として社會の問題となつてきた。従つて社會に於てともに楽しみをうる方法として Public Recreation の顯著な發展があり、大衆の幸福を目指すという点に於て Public Recreation はヒューマニティーに根差している。しかもレクリエーションは主として play であるから、play 活動に於ける變化性、適應性、活動性、愉悅性を通して play の特質とする平等の人間關係の道德 (Human-relation-ethical) を協同の中に形成する機能をもつから、やがて望ましい協同社會のメンバーとなる資格を得しめることになる。M. Madden<sup>(19)</sup>「余暇を大衆が如何に送るかが將來の文明を決定する大きな尺度となるであらう」といつているが、大衆の余暇生活の向上は社會の文化的發展の具体化であり、幸福な人間生活への發展を目指すデモクラシーの本質たるヒューマニズム思想から出發していると考えべきであらう。余暇生活がこのような社會改良の役割をはたし、大衆の幸福を目指すという點を認識するならば、余暇の問題は國家及び社會の民主化に貢獻する重要問題として注目しなければならない。

以上心理學的(弛緩性、リズム性、愉悅性)生理學的(健康性と創造性)社會學的(民主的文化)の三つの觀點から余暇の機能と價值について考察してきた。しかしてこういつた余暇の機能の再認識と余暇生活の充實向上は教育によつて可能なのである。(總てでないまでもその重要な領域に於ては)。そして知識は活動にならなければならないのであるから、余暇教育 (Leisure time Education) を教育の重要な領域として位置づけて實際的に活動しなくてはならない。さてこの場合、余暇教育は、余暇の意義の理解と態度及び余暇時間利用の技術の修得の兩面から計畫され實行さなくてはならないであらう。暇余教育の方法的問題については別の機會にに發表したいと望んでいる。

#### 附 記

余暇の問題は私の大學卒業期に於ける最大關心事の研究テーマであり、この問題を中心として更に深い研究と充實したアルバイトを持ちたいと考へていました。今この小論文を發表するにあたり、問題の選定、研究方法、進行等について直接的或は間接的に絶大な指導を下さいました東京教育大學教育學部長石山脩平教授、前川峯雄助教授に深甚なる感謝の意を表するものであります。

#### 文 献

- (1) W. S. Monroe: Encyclopedia of Educational Reserch. 1941. (Recreation)
- (2) 小川信一: 勞働者の狀態及び勞働運動史(上)、日本資本主義發達史講座、昭和7年 岩波書店 p. 12.
- (3) Arthure J. Jones: Principle of Guidance. 1945. p. 432.
- (4) G. M. Gloss: Understanding of Recreation Planning. (Health and physical Education, December 1938)
- (5) 山鹿素行: 武教小學、山鹿素行全集1巻、昭和7年、岩波書店、p. 487
- (6) Mabel Madden: Recreation Look at Physical Education. (H.P.E. June, 1938)
- (7) Mitchell and Mason: The Theory of Play. 1924.
- (8) アレキヌ、カレル、人間この未知なるもの、櫻澤如一譯、昭和13年、岩波書店、

- (9) 前掲 (7)  
 (10) L. A. Cook: Community Background of Education, 1938. p132.  
 (11) 前掲 (7)  
 (12) 前掲 (4)  
 (13) 波多野完治: 子供の娯楽心理 (児童心理、昭和24年7月號 金子書房)  
 (14) H. S. Diehl: Text Book of Healthful Living, 1945.  
 (15) 前掲 (6)

## 日本靈異記と冥報記

— 支那の説話集と我國説話文學との關係についての覺書 —

小 泉 弘

Hiroshi Koizumi : Nippon-Ryōiki and Meihoki.

On the Relation between Chinese and Japanese Narrative Literature.

- (1) 従來の研究についての概観 (2) 靈異記と冥報記について (3) 兩書の説話の關係について  
 (4) 成立事情についての影響關係 (5) 結語

### 1. 従來の研究についての概観

日本靈異記と冥報記との關係については、早く芳賀博士が、「考證今昔物語集」の序論に於て、「斯くて平安朝の初、延暦年間には、冥報記、冥報記拾遺等に收められた説話と同形式のものが、地名と人名とを日本に改めて、日本靈異記となつて現れるまでになつた。」と云つて居られる。橋川正氏も、「靈異記の研究」<sup>(1)</sup>に於てこれを承認されている。

これに對して岩淵悦太郎氏は、「冥報記は、靈異記上卷の序にその名が見えているばかりでなく、卷下の如法奉寫法花經火不燒緣第十の條の終りの方に、

諒知河東練行尼所寫如法經之功茲顯、陳時王與女讀經免火難之力再示……

とあるのは、冥報記に見える河東練行尼の事をさすものであつて、靈異記の著者が唐臨の冥報記を見たと言ふ事は、先づ間違のない事實であると思われる。しかし、冥報記や金剛般若集驗記中の説話が、實際にどれ程靈異記中の説話に影響を與えているかは検討を要する問題であり、結論としては、芳賀博士の様に冥報記などの説話を、その地名と人名とを日本に改めたものが靈異記の説話だと、概括的に云えるかどうかが問題になる。多くはそれ程密接な關係があるとは思われない。」と云つて居られる。<sup>(2)</sup>

片寄正義氏は、岩淵氏の指摘された靈異記下卷第十の卷末の記事の他に、その本文たる牟婁沙彌の説話と冥報記の河東練行尼の兩話を比較する事により、この二つの話が共に法花經書寫の靈驗譚であつて、その思想的背景の全く一致する事、説話の形式方面、部分的描寫の點からも、——經文書寫の場面、靈驗功德の描寫等——酷似する所があり、思想・形式・内容何れの方面からも相當に類似性をもつものであつて、結局「前記の芳賀博士の所説も多少云い過ぎてゐる点もあり、又岩淵氏の考えられる程淺いものとも考えられないように思う。その中間位に考定しては如何なものであろうか」と云い、更に、「この兩話は、兩書中最も關係の深いものであり、この他のものについ